徳川美術館・蓬左文庫開館 80 周年記念展示

コレクションが語る 蓬左文庫のあゆみ

平成 28 年 1 月 5 日 (火)→4 月 10 日 (日)

平成 27 年（2015）11 月、尾張徳川家十九代義親が、東京目白の邸内に蓬左文庫を開館してから 80 年を迎えました。蓬左文庫は尾張徳川家の歴代当主が収集した書物を中心に、貴重な古典籍を多く所蔵しています。江戸時代後期には藩による学問振興にともなって新たな蔵書が加わり、蔵書は藩士たちにも広く活用されました。明治以降にも旧藩士から寄贈された書物、名古屋の蔵書家から寄贈された本などが加わり、現在では極めて多彩なコレクションを所蔵しています。この展覧会では、江戸時代の「御文庫」、明治維新から蓬左文庫設立に至る黎明期、戦後の名古屋移転から現在まで、各時代におけるコレクションにスポットを当てることで蓬左文庫のあゆみを振り返ります。

第一章　江戸時代のコレクション　―殿様と藩士の「御文庫」―

蓬左文庫の中核は、江戸時代における尾張徳川家「御文庫」の旧蔵書である。そこに含まれるのは、初代義直以来の歴代当主が収集したコレクションだけではない。江戸時代後期には、藩の学問振興を受けて、藩士のなかにも膨大な蔵書を収集するものが現れ、その一部は　尾張徳川家の文庫に献納・収集された。こうして、尾張徳川家には全国有数の大名文庫が形成されたのである。

第二章　近代のコレクション　―「蓬左文庫」の誕生―

廃藩置県直後、尾張徳川家は混乱のなかで一部の蔵書を売り払ったが、幸い蔵書の大半は同家のもとに残された。その後は維新史編纂にともなって収集された書物、旧藩士から献上された書物などが加わり、蔵書はむしろ増加していった。明治 41 年（1908）に尾張徳川家を継いだ徳川義親は、同家の蔵書に「蓬左文庫」と名付け、その整理と目録作成を進めた。そして昭和 10 年（1935）、自身の設立した財団法人尾張徳川黎明会のもと、東京目白の邸内に公開文庫としての蓬左文庫を開館したのである。

第三章　戦後のコレクション　―「市民の文庫」へ―

昭和 25 年（1950）3 月、蓬左文庫は黎明会から名古屋市に移管され、蔵書も名古屋に里帰りした。名古屋移転後、蓬左文庫は地元のコレクターや旧家から蔵書の寄贈を受け入れ、その数は 5 万点以上におよんでいる。また、『名古屋叢書』全 69 冊をはじめとする資料編纂・刊行も行い、地域における歴史文化の基盤づくりに努めてきた。蓬左文庫は江戸時代以来の大名文庫としての顔だけでなく、より多彩なコレクションを収集・公開する「市民の文庫」としての性格を備えるに至ったのである。

第四章　蓬左文庫の絵図コレクション

蓬左文庫には、書物だけではなく 2,000 枚を超える絵図類も伝来している。その内容はきわめて幅広く、いわゆる地図の範疇に入るものから、城絵図・合戦図・屋敷図・庭園図・儀式図さらには、神社仏閣の扁額や宝物の図なども含まれる。幕府の命を受けて作成された国絵図、藩領の防衛や地勢を知るための領内の図、藩主の屋敷やその庭園の計画や管理のための図面、日本地図や世界地図等々、当時としてはどれも機密事項に属する内容を含む、貴重なコレクションといえる。